

第4課 「信仰によって義とされる」

* 「信仰によって義とされる」信仰とは、「イエスの信仰」と「私の信仰」とに理解される。イエスの信仰が人類を代表しての神に対する信仰として認められ受け入れられ、私たちはイエスが救い主（キリスト）であることを信じる信仰によってイエスの義を受け入れ義と認められる。イエスの義によって私たちは救われる事を心に刻み付け、そのために大きな犠牲がともなった事を決して忘れてはいけない。善なる者（イエス）の報いを悪人（罪人なる私）が受け、悪なる者の報いを善人が代わりに受けて下さった。

1. 律法を実行するとは

- **律法とは何か**：律法を実行することによって私たちは義とされるのではない。律法の役割は罪を明らかにし、罪の自覚を促す事。罪人を導き、罪の解決を心から求めさせる事にある（ローマ3：19～20）。律法は「できる」というより、むしろ「できない」という事に気づく事であり、これは私たちの心に救いのきっかけを作り出す。何事も原因がわからなければ、それに対処することはできない。律法は何が罪で、その原因は何かという事を示し、その解決の仕方を求めようとする思いを欲する事を促す役割を負っている。
- **罪の現実**：罪とは何だろうか。人は何故罪を犯してしまったんだろう。どうして神は人が罪を犯さないように造らなかったのだろう。罪の現実の中であって、私たちはその悲しみや恥ずべき事を少なからず感じているのでそんな思いを持つのだと思う。しかし、実際のところ私たちは、その悲しみや恥をなるべく意識しないように生きているのではないだろうか。出来る事なら考えたくない。しかし、これは考えなければならぬ、解決しなければならぬ大きな問題なのである。人は罪によって弱くなっている（心も体も）。だからこそ、神のご計画に耳を傾け、心を向ける事が大切だと思う。

2. 信仰によって義と認められる

- **信仰と義**：「義」とは律法によって示される。律法を行なう事は大切である。しかし、律法が私たちが救うのではない。「律法とは関係なく」（ローマ3：21）と、パウロが語ったのはそういう意味からである。神は人が律法を全うする力がないことを知った上で、律法を与えている。ここに何らかの意味がある。律法を守らないと天国に入れない。あなたを救わないという事ではない事は明らかだ。私たちは自分の罪を曖昧にしがちである。また、自分の罪をわかっているようでわかっていないのも確かである。罪の自覚が実感できないのがその証拠である。だから律法によってはっきり示されなければならない。具体的に密接に罪を自覚できないと、次のステップを踏めないからだ。つまり、罪を曖昧にする事によって、罪という大きな問題を解決できないまま過ごしてしまう。罪は放置されたままになる。では、罪はどう解決されるのだろう。私たちにはそれを解決する力も知恵も無い。だから、神に助けを求める。そのためには全てを委ねる必要がある（包み隠さず全てを明らかにし、それをお任せする）。イエスは人類の代表として完全なる人生を歩んで下さった。その義が私たちの代わりに認められるのである。それ故に、罪を悔い改め、イエスを救い主と信じ受け入れ、模範に従って生きる喜びを体験する事が必要である。
- **恵みと義認**：私たちはイエスの贖いの業（十字架）を通して、神の恵みにより、無償で義とされる（ローマ3：24）。十字架の犠牲は、わたしたちの罪の身代わりとして死ぬ事。その命を代価として私たちの命を買い戻す事である。その事を信じ受け入れると、救いの確証が与えられる。それは、全て考えられない程、大きく、深い神の愛のもとに、当たり前のように与えられる。それを受ける為に神は私たちに見返りは求められない。ただ愛するが故に救いたいのである。ただし十字架は神の義と愛の融合点であり、私たちに対して罪の悔い改めと、信仰を求める。十字架により誇るべき一切のものは取り除かれる。神の愛に触れると人は誇る事ができない（ローマ3：26～27）。愛により、恵みにより救いは全ての人に提供されている。それを受ける時、私たちは決して罪が無くなっている訳ではない。しかし、人類の代表者としてのイエスの功績を私たちのものとして認め、神の家族として招き入れて下さる（義認）。神の義が提供されるのである。その恩を感じた私たちは、ただ黙って何もせずにいることはできない。その恩に報いたいと願うはずである。聖霊の導きのもとに、神の愛の完全なる現れであるイエスを模範として、造り変えられてゆく喜び（聖化）を体験してゆく。
- **信仰と行い**：ヤコブは行いの伴わない信仰は本当の信仰ではない事を説いている（ヤコブ2：14～18）。パウロも律法が必要ないとは説いてはおらず、むしろ正しい律法理解を勧めている（ローマ2：12～16）。ただ、パウロは当時のユダヤ人達の律法の扱いについての問題を指摘しているのである。律法主義のもとであって、神の愛が軽視され、いたずらに自己満足や自己称揚、自己中心的になる事に注意を促している。また、同時に道德律の大切さを語る。律法を行なう事は罪人にとって困難な事（悪の傾向を持つので）である事を認め、自分の知恵や力に頼る事を控える。自分に頼ることによって神を忘れないためである。律法はむしろ神を示す（品性、完全性、素晴らしさ）。それは人にとっては理想的な姿である。要は、それをどこに求めるかである。自分にか（知恵、力、努力、才能、経験など）、それとも神にか（愛、完全、全知全能、創造主、救い主、贖い主など）。信仰は聖霊に導かれ、律法に基づき正しい選択をするだろう。